

Je t'attendais. 型半過去再考 Réflexions sur un emploi de l'imparfait du type "Je t'attendais."

東 郷 雄 二 (Tôgô, Yuji)

Cet article a pour but de mettre en lumière les caractéristiques d'un emploi de l'imparfait du type *Je t'attendais*. Cet emploi pose des problèmes à l'analyse traditionnelle de ce temps verbal en ceci qu'il est utilisé dans une phrase en isolation contrairement à la vue répandue selon laquelle l'imparfait serait un temps verbal "non-autonome", et qu'il n'exprime pas la simultanéité avec un autre temps verbal, comme dans *Julien lisait le journal lorsqu'Eléonore entra dans le salon*. Dans cet article, nous présentons d'abord le schéma général des temps verbaux du français, schéma constitué de deux "zones", au centre duquel se situent le présent et l'imparfait. L'imparfait du type *Je t'attendais* peut être analysé comme la saisie d'un procès situé en zone du passé, vu à partir de la zone du présent. La mise en vigueur des deux zones explique le fait que le procès exprimé par *Je t'attendais* n'est plus en cours au moment présent.

キーワード: 半過去 (imparfait), 同時性 (simultanéité), 視点 (point de vue), 談話の半過去 (imparfait de discours), 語りの半過去 (imparfait de récit)

1. はじめに

本稿が分析の対象とする「Je t'attendais. 型半過去」とは、阿部 (1989)で初めて本誌で取り上げられた半過去の用法であり、次のような例をさす。

- (1) a. (人が来て) Je t'attendais.
- b. (人に会って) Je te cherchais.
- c. (人が入って来て) Je dormais.
- d. (確証を得て) Tu avais raison.
- e. (見つけて) Ah ! vous étiez là.
- f. (同意を得て) Je savais que tu serais contente.

このタイプの半過去は今まであまり取り上げられることがなかったが、通常の半過去の用法と比較したとき、次のような特異な性質がある。

- (A) 半過去は「非自立的」時制であり¹⁾、単純過去などの他の時制や、*à huit heures du soir*のような時間副詞句の支えを必要とするとされているが、*Je t'attendais*. 型半過去は自立的に用いられ、そのような支えを必要としない。
- (B) 半過去は時間軸上に自ら定位できないため、他に「基準点」を必要とするとされる。しかし、*Je t'attendais*. 型半過去では逆に「基準点」が示されておらず、言語的に表現された基準点を求めることができない。

この(A)と(B)とはメダルの裏と表のようなもので、両者は密接に関係している。

ちなみに、現在多くの研究者が支持している「半過去は基準点との同時性を表す」という説に反対する意見が昔からあったことに注目しておこう。Sten (1952)は次のようにはっきりと、半過去は常に同時性を表すわけではないと述べている。

D'abord l'imparfait n'indique pas toujours simultanéité, il peut se trouver avec un présent *Hier*

ils nous faisaient la causette, à présent ils se cachent (Sartre, Mort 83). (Sten 1952)

またLe Bidois & Le Bidois (1967)も次のような例を挙げて、同時性を半過去の本質と見なすことに警鐘を鳴らしている。

(2) a. *Naguère Stamboul s'appelait Constantinople.*

b. *Les Romains étaient un peuple superstitieux.*

しかしこれらは少数意見に留まる。しかも半過去が同時性を表す場合と表さない場合があるとするならば、その両方の用法を統一的に説明できなくてはならないが、上に引用した著者たちもそれはできていない。

本稿ではJe t'attendais.型半過去を考察するにあたって、まず半過去をフランス語時制体系全体のなかに位置づけることが必要であるとの前提から出発し、同時性を表さないように見えるJe t'attendais.型半過去と、同時性を表す通常の半過去の用法を、統一的に説明することをめざす。

2. 先行研究

まずJe t'attendais.型半過去の先行研究を概観し、その問題点を見ることから始めたい。

2.1. 西村 (1985)

西村はまず次のような「現時点との関連で用いられる大過去」の用法に着目する。

(3) a. *Vous ne tenez pas ce que vous aviez promis.*

b. *Ce n'est pas ce que j'avais espéré.*

c. *Jean vient ? Je lui avais écrit de ne pas venir.*

この用法について西村は次のように主張している。

大過去形は発話の現在を基準点として「不連続」を表わす。アスペクト的には「点」を、時間的には「発話時より前」により特徴づけられる。

次の例が示すように、複合過去の結果生じた事態は現在まで連続して成立するが、大過去は現在との不連続を表すと西村は言う。

(4) a. *J'ai oublié.* 「忘れた」⇒その結果「覚えていない」

b. *J'avais oublié.* 「忘れていた」⇔しかし「今は思い出している」

(5) a. *Je l'ai toujours aimé.* 「今までずっと愛してきた」⇒「今も愛している」

b. *Je l'avais toujours aimé.* 「今まで愛してきた」⇔しかし「もう愛せない」

この「不連続」という概念をキーワードとし西村は半過去についても次のように主張する。

半過去形は発話の現在を基準点として「不連続」を表わす。アスペクト的には「線」を、時間的には「発話時より前」により特徴づけられる。

半過去が表す現在と不連続は次の例 b. が示しているとされる。

(6) a. *Je travaille.* 「勉強しているんだ」⇒「だから邪魔するな」

b. *Je travaillais.* 「勉強していたんだ」⇒「でも他のことをしてもいい」

この「不連続」という性質から、以前の状況との対立を表す半過去や、確認を表す半過去の用法が生まれるとされている。

(7) *Nous nous entendions bien.*

「僕たち、せっかく気が合っていたのに」⇒「なのに別れなくてはならない」

(8) *Je m'en doutais .*

この西村の分析には次の問題点を指摘することができる。

- (A) 半過去が「不連続」を表わすとする、半過去で表された事態は現在では成立しないことになる。ところが *Vous étiez là!* のように、「あなたがそこに居る」という現象レベルでは事態が現在でも変わらず成立するものがあり矛盾する。
- (B) 「基準点との同時性を表す半過去」(ex. *Estel lisait quand je suis entré dans le salon.*) は、「現在との不連続」を表さない。西村説では *Je t'attendais.* 型半過去とふつうの半過去を統一的に説明することができない。

2.2 阿部 (1989)

阿部の主張は次のように要約できる。

この型の半過去には、*Je t'attendais.* なら「待つ行為」にとっての「到着」、*Je te cherchais.* なら「探す行為」にとっての「発見」のように、均質な事行にとって外的な事件が起きるといふ特徴がある。この外的な事件を「異質なファクター」と呼ぶ。異質なファクターは、必ずしも事行を終了させるものではなく、関心の対象となる期間をその終点において限定する働きを持つ。話し手は異質なファクターによってマークされた時点から以前を振り返って、「～だった」と述べているのである。

阿部の主張には次のような問題点を指摘することができる。

「話し手は異質なファクターによってマークされた時点から以前を振り返る」とされているが、一般に「振り返る時に位置するポイント」は「視点」と考えられる。すると *Je t'attendais.* 型半過去では視点は現在に位置することになる。ところが「基準点との同時性を表す半過去」(ex. *Estel lisait quand je suis entré dans le salon.*) では、視点は過去に移動し、事態を内部から描写するとされている。したがって両者を統一的に説明することができない。

2.3 春木 (1991)

春木の主張は次のように要約できる。

Je t'attendais. 型の半過去では、過去のある時点においてある事態が存在していたことを、発話時点において改めて確認し直している「再確認」という行為が行なわれている。半過去は一般に、発話空間とは異なる認識空間を形成する。*Je t'attendais.* 型の半過去でもそれは同じであり、事行を現在の視点から見ているのではなく、視点を過去に移している。再確認という行為は、現在の事態の発生が契機となつて行なわれ、発話時と対比可能な過去のある時点が問題になる。したがってこの場合も、半過去の非自立性という性格は存在している。

春木の主張には次の問題点を指摘することができる。

- (A) 春木は「半過去は発話空間とは異なる認識空間を形成する」との主張をもとに、*Je t'attendais.* 型でも視点は過去の認識空間へ移動しているとする。しかしこの主張と、「過去の事態を発話時点において改めて確認する」という主張は両立しえない。発話時点において確認するのなら、視点は異なる認識空間にではなく、発話時点にあるはずだからである。
- (B) 視点が過去に移動しているにしては、半過去の特徴とされる「事態の内側からの描写」という効果が *Je t'attendais.* 型の半過去にないことを説明できない。

視点の移動に関しては後に詳しく触れるが、ここで *maintenant* テストを施してみよう。このテストは、*maintenant* は時間軸上のどこに視点があるかを示す標識であり、ある時制

が *maintenant* と共起しないということは、その時制が表す時点に視点を置くことができないことを示すという前提に基づいている²⁾。

- (9) a. *Maintenant, il court.* 「今 (や) 彼は走っている」
 b. *Maintenant, il courait.* 「今や彼は走っていた」
 c. **Maintenant, il courut.*
- (10) a. **Maintenant, je t'attendais.*
 b. **Maintenant, vous étiez là.*
 c. **Maintenant, je m'en doutais.*

(9) a.と(9)b.が示すように、現在形と半過去は *maintenant* と共起するので、現在形が表す現在時点と、半過去形が表す過去の時点に視点を置くことができることがわかる。一方(9)c.が示すように単純過去が表す時点に視点を置くことはできない。*Je t'attendais.* 型半過去にこのテストを施すと、(10)が示すように*maintenant* と共起しない。ここから*Je t'attendais.* 型半過去では視点は過去に移動していないと結論することができる。

3. 半過去の全体像へ向けて

3.1. フランス語 時制の全体図式

時制論の難しさは、ひとつの時制のみを取り出して論じることが不可能で、ひとつの時制を考察しようとする他の時制に触れざるをえず、結局は時制体系の全体を問題にしないてはならないという点に存する。*Je t'attendais.* 型半過去についても同じことが言える。この半過去の用法を論じるには、半過去の用法全体についての見通しを提示しなくてはならず、そのためにはフランス語の時制全体における半過去の位置づけを明らかにする必要がある。本稿ではこのような立場に立脚して、フランス語時制について次のような全体像を提案する³⁾。

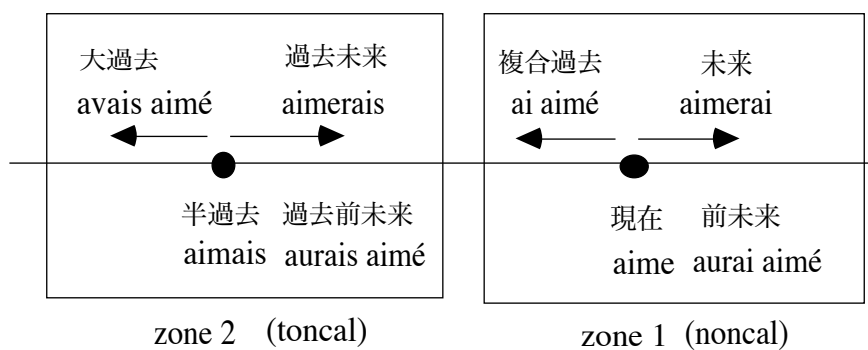


Fig. 1

この図式は次のような主張を含んでいる。

- (A) zone 1 は「現在」を中核とする時制群である。zone 1 に属する時制はすべて、「現在」の表す発話時点 t_0 に視点を置いて眺められた事態を述べる。
- (B) zone 2 は「半過去」を中核とする時制群である。zone 2 に属する時制はすべて、「半過去」の表す過去の時点 t_1 に視点を置いて眺められた事態を述べる。
- (C) 視点を置くことができるのは、現在と半過去に限られる。その他の時制は、「基準点」にはなりえても、視点を置くことはできない。
- (D) 過去・現在・未来の三分法が定説となっているが、時制は zone 1 / zone 2 の二分法で

考えるべきである。未来は独立の zone を形成しない。

(E) zone 1 を時間軸に沿って過去方向に平行移動すると zone 2 が得られる。この意味で、zone 2 は zone 1 が過去に投影されたものである。半過去は文字通り「過去における現在」である。

(F) 単純過去は上の図式に位置づけることができない。単純過去はこれとは別の原理によって機能する。

(G) zone 1 と zone 2 とは断絶している。ここで言う「断絶」とは、異なる「世界」を構成しているという意味である。

上記(C)の「視点」と「基準点」のちがいについては後述する。(D)については今回は論じる余裕がない。(E)は本稿の中核的主張のひとつであり、半過去を「過去における現在」とする見方は今までにも提示されているが、その意味するところをあますことなく展開した研究は未見であり、これが本稿のめざすところである。(F)についても今回は論じる余裕がない。(G)が半過去のモーダルな価値に通じることがはすぐにわかるだろう。

上の図式について付言しておく、zone 1 に含まれている複合過去は、発話の現在とつながりのある用法 (ex. Je vous ai toujours aimé.) の複合過去であり、語りにおいて単純過去と同じ価値で用いられた複合過去ではない。後者の場合は(F)の主張が該当し、単純過去と同じく上の図式に位置づけられないと考えている。

3.2 Reichenbach (1966) の不備と視点の必要性

Reichenbach (1966) は、発話時点 S、動詞の表す事態の生起した時点 E、基準点 R からなる時制図式を提案した。ここでは Reichenbach の時制図式の不備を指摘し、基準点 R 以外に視点が要請されることを示す。Reichenbach の時制図式は次のようなものである。

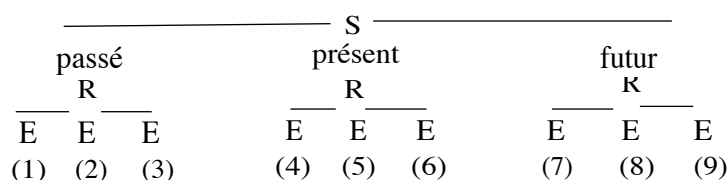


Fig. 2

Reichenbach にならって、同時性をコンマで、継起性を — で表すとフランス語の時制は次のように表されることになる。

- (1) E—R—S : 大過去, 前過去
- (2) E, R—S : 半過去, 単純過去
- (3) R—E—S : 過去未来
- (4) E—R, S : 複合過去
- (5) E, R, S : 現在
- (6) R, S—E : 該当する時制なし
- (7) S—E—R : 前未来
- (8) S—R, E : 単純未来
- (9) S—R—E : 該当する時制なし

この対応表では、大過去と前過去、半過去と単純過去が区別できないことと、(6)と(9)に該当する時制がないという不備があるが、ここでは問題にしない。問題にしたいのは、

次の例の過去前未来形が処理出来ないという点である。

(11) Hélène pensait que Julien *serait arrivé* chez lui avant minuit.

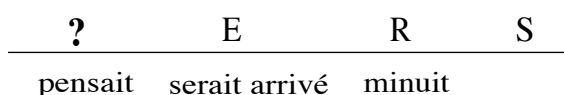


Fig. 3

minuit が基準点 R となり、過去前未来 *serait arrivé* が出来事 E を表すことは明らかである。すると主節の半過去 *pensait* がはみ出してしまい、*pensait* に与えるべき位置づけがないことになる。この不備を補修するためには、S, R, E 以外に「視点」を設定する必要がある。次の仮説を提案する。

【仮説1】

事態が他の事態と相対的に位置づけられる「基準点」とは別に、知覚主体が事態を眺める場所である「視点」が必要である。

ここで基準点と視点のちがいを次のように定義しておこう。「視点」とは、話し手（または話し手が自己投影する人物）が、その時点に身を置いて、そこから過去を振り返り、未来を望むことができるような時点を言う。「基準点」とは、話し手（または話し手が自己投影する人物）が、ある出来事 E1 を時間軸上に位置づけるときに利用する他の出来事 E2 の起きた時点を言う。

多くの例では基準点と視点とが一致するように見えるため、両者は混同されることが多いが、区別することが必要である。本稿の主張は上の(C)でも述べたように、「視点」を置くことができるのは現在と半過去に限られるというものである。現在と半過去が zone 1 と zone 2 の中核時制として上の図式で特権的位置を占めているのはこの特性による。

3.3. 時制の一致

上に提示した図式の妥当性は、いわゆる従属節での時制の一致からも支持される。

(12) a. 現在 → 半過去

Il a dit : «*J'habite à Paris.*» → Il a dit qu'*il habitait à Paris.*

b. 複合過去 → 大過去

Il a dit : «*Paul a trouvé un emploi.*» → Il a dit que Paul *avait trouvé un emploi.*

c. 単純未来 → 過去未来

Il a dit : «*J'irai à Paris demain.*» → Il a dit qu'*il irait à Paris le lendemain.*

d. 前未来 → 過去前未来（条件法過去）

Il a dit : «*Je serai revenu avant midi.*» → Il a dit qu'*il serait revenu avant midi.*

zone 1 の四角を切り取って zone 2 の上に重ねたとき、上下に重なる時制が一致により対応する時制になる。zone 2 が zone 1 を過去方向に平行移動したものであり、半過去は「過去における現在」であることを考えれば、上のような時制の一致は当然の現象である。またこの図式から従属節の半過去は時制の一致を起こさないことも理解できる。

4. ふたつの半過去

Le Guern (1986) は Benveniste の *récit (histoire) / discours* の区別を援用して、ふたつの半過去を区別した。Le Guern (1986) の主張は以下のように要約できる。

(13) Pierre, qui *était* mon voisin au Canada, vient dîner ce soir.

Le Guernはこのタイプを *imparfait de discours* と呼び、(A) 発話時である現在を基盤とする半過去である、(B) 半過去が表す事態 (E1) は、過去の時点 t_1 において真であるが、現在 t_0 では真ではないことを意味する、という特徴があるとした。

(14) Jacques commença l'histoire de ses amours. C'était l'après-dînée : il *faisait* un temps lourd ; son maître s'endormit.

Le Guernはこのタイプを *imparfait de récit* と呼び、(A) 発話時である現在は関与しない半過去である、(B) 半過去が表す事態 (E1) が過去の時点 t_1 において真であることを述べるだけであり、現在 t_0 において E1 が依然として真であるかどうかは不問に付される、という特徴があるとした。

Le Guernのこの分析はその後の半過去研究であまり顧みられることがなかったが、本稿が提案する時制図式によく合致しており、次のように捉え直すことができる。

まず、*imparfait de discours* で重要なのは、発話時である「現在」を基盤とする半過去であるという点である。現在を基盤とするということは、「話し手の視点が現在に置かれている」ということを意味する。本稿の提案する図式では、zone 1 と zone 2 の両方が発動され、視点は zone 1 に置かれていることになる。従って Le Guern の分析を本稿の趣旨に沿って言い換えると次のようになる。

(A) *imparfait de discours* では、zone 1 と zone 2 の両方が発動される。zone 1 の中核に位置する「現在」を基点として、zone 2 に含まれる過去の事態を述べている。

(B) *imparfait de récit* で発動されるのは zone 2 のみである。zone 1 は背景化されて隠れるため、zone 1 の中核にある「現在」の関与は無効化される。

これを Le Guern が用いた例文を使って示すと次のようになる。

imparfait de discours

Pierre, qui *était* mon voisin au Canada, vient dîner ce soir.

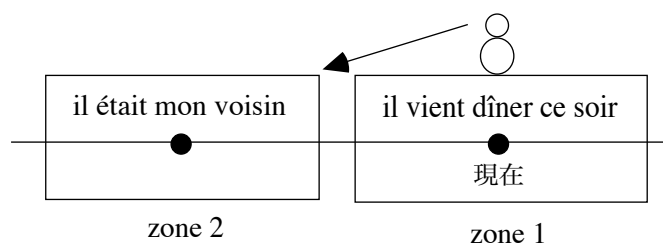


Fig. 4

図の雪だるまの記号は視点の位置を表す。話し手 (認識主体) は zone 1 の現在に身を置いて、zone 2 における事態 [il était mon voisin] を認識し言語化している。ここで重要なのは、zone 1 と zone 2 とは断絶しているという点である。次の仮説を提案する。

【仮説2】

imparfait de discours では、話し手は zone 1 の中心である現在に視点を置いて過去を眺めている。zone 1 と zone 2 とは断絶しているため、zone 2 で真である事態が zone 1 では真ではないという含意が生じる。

これが「現在との対比を示す半過去」であり、西村が指摘した「不連続」という半過去の特性は、このように zone 1 と zone 2 の「断絶」という概念によって容易に回収

することができる。

これにより imparfait de discours では半過去が過去の基準点との同時性を表さないことが説明できる。imparfait de discours が表すのは「現在から見た過去の事態」であり、「過去のある時点と同時的な事態」ではないからである。次の仮説を提案する。

【仮説3】

imparfait de discours は「同時性」を表さない。従って、半過去の定位に要請される基準点を必要としないばかりか、基準点を想定できないこともある。

本稿の冒頭近くに挙げた *Hier ils nous faisaient la causette, à présent ils se cachent.* や、*Naguère Stamboul s'appelait Constantinople.* はともに imparfait de discours の例であり、「同時性が成り立たない」とされたのは正しい観察なのである。ここで時間副詞の *hier, naguère* が基準点を提供し、半過去はそれと同時性を表すと考える向きもあるかもしれないが、*hier, naguère* は文全体が解釈される時空間的枠組を提示しているだけで、半過去の解釈に関わる基準点を提供するわけではない。

一方、imparfait de récit は zone 2 しか発動せず、現在の事態を考慮しないため、過去において真であった事態 E1 が現在では真か否かを問わない。次の仮説を提案する。

【仮説4】

imparfait de récit は、単純過去や時の副詞 (ex. *à huit heures du soir*) などによって外的に与えられた基準点 t_1 との「同時性」を表す。この一連の操作は zone 2 において遂行され、zone 1 は発動されない。その結果として、半過去が表し t_1 において真である過去の事態が、現在 t_0 において真であるかどうかは問われない。

imparfait de récit の図式は次のように表すことができる。zone 1 が点線で描かれているのは、zone 1 が背景化されていることを示す。zone 1 が背景化されることにより、発話時点の現在は無効化される。

imparfait de récit

Yannik entra dans le salon. Eléonore *buvait* un café.

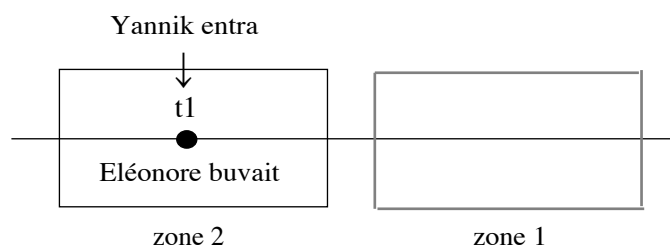


Fig. 5

雪だるま印は zone 2 に視点が置かれていることを表す。先にも述べたように単純過去には視点を置くことができない。しかし、単純過去の文 *Yannik entra dans le salon.* により、過去の時点 t_1 が外部から与えられると、 t_1 を中心に過去スペースを開いてそこに視点を移動させることが可能になる。このとき半過去 *buvait* は t_1 との同時性を表す。

5. Je t'attendais. 型半過去の説明

以上の分析を踏まえて、*Je t'attendais.* 型半過去を説明する。*Je t'attendais.* 型半過去は基準点を必要とせず自立的に使われる。したがって、これは imparfait de discours の

一種と見なすことができる。すると自動的に次の点を導くことができる。

(A) zone 1 と zone 2 の両方が発動される。

(B) zone 1 の現在に視点を置いて zone 2 の過去の事態を眺めている。

(C) zone 1 と zone 2 とは断絶しているので、Je t'attendais. が表す過去の事態 [je-t'attendre] と現在の間には「断絶」がある。

これによって、Je t'attendais. 型半過去に関して今までに提出されてきた疑問に正しく答えることができる。

まず西村 (1985) はこの型の半過去は「不連続」を表すとしたが、その理由は [je-t'attendre] が成立する zone 2 と現在が構築する zone 1 の間に「断絶」があるからである。このとき「断絶」は、事象レベルにおいては「現在における事態の不成立」を表す。すなわち現在私はもう君を待ってはいないのである。

阿部 (1989) はこの型の半過去の成立には、Je t'attendais. なら「君がやって来ること」という「外的ファクター」が必要であるとした。その理由は、zone 2 と質的に異なる zone 1 を時間の流れの中に切り出す必要があるためである。「君がやって来た」という外的ファクターにより、事態 [je-t'attendre] は過去のものとなり、zone 2 と zone 1 とが時間の中に切り分けられることになる。

さて、ここで問題になるのは zone 1 と zone 2 の間の「断絶」の性質である。というのも Je t'attendais. 型半過去のなかには、現在での事態の不成立を意味しないものがあるからである。

- (15) a. Ah, vous étiez là! → あなたは今でもそこにいる
b. Je m'en doutais. → 私は今でもそう思っている
c. Tu avais raison. → 君は今でも正しい

これはどう説明できるだろうか。これを説明するためには、次のような半過去の用法が手掛かりになる。

- (16) a. Il s'appelait comment déjà ?
b. J'oubliais. Demain, c'était l'anniversaire de ma femme.
c. [出発時間より前に] Ton avion partait à 16h30. (Bres 2005)

b. の例を取ると、[ce-être-l'anniversaire-de-ma-femme] という事態は、事象レベルで考えると未来に関わる事柄であり、それが半過去で表現されるの是一見すると理屈に合わない。c. も同様で、[ton-avion-partir-à-16h30] は発話時点以後に起きる事態についての予定を述べているのに半過去は一見そぐわない。a. ではその人の名前が某であることは、過去においてと同様、現在においても未来においても成立する事態である。

この半過去は、「事象レベル」ではなく話し手の「認識レベル」に関わっていると考えなくてはならない。(16) a. の半過去 s'appelait が表しているのは、時間的な「過去」ではなく、「私が名前に関する知識を保持していた過去」である。(16) b. では、「忘れていた過去」と「思い出した現在」とが対立している。(16) c. では、「君に飛行機の出発時間を教えてもらった過去」を想起することで情報を確認している。つまり、ここでは単なる過去という「事象レベル」の時間が関係しているのではなく、話し手の「認識レベル」における「認識の更新・確認」が問題になっている。

これを次のように図示することができる。

Il s'appelait comment déjà ?

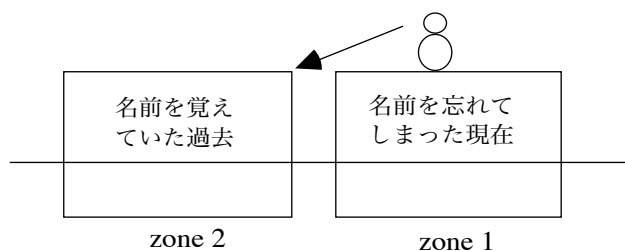


Fig. 6

この考察に基づいて次の仮説を提案する。

【仮説5】

「失念・再確認」の半過去は、「事象レベル」における「過去」を表現しているのではない。話者の「認識レベル」における、「事象に関して現在とは異なる認識状態にあった過去」を表している。

これにより Je t'attendais. 型半過去のうち現在でも事態が成立しているケースを正しく分析することができる。Ah, vous étiez là! を例に取る。

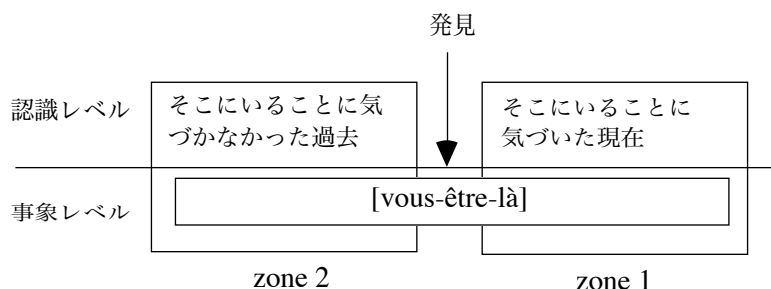


Fig. 7

この図式は次のことを意味している。まず、事象レベルでは [vous-être-là] は zone 2 でも zone 1 でも真であり、半過去はそのことを問題にしているわけではない。相手の存在に気づいた現在 (zone 1) に視点を置いて、存在に気づかず現在とは異なる認識状態にあった過去 (zone 2) を振り返り、zone 2 においても実は [vous-être-là] という事態が成立していたことを、発見の驚きとともに確認している。

6. 半過去の他の用法

本稿が提案する時制の全体像に基づく半過去の分析が妥当であることを示すためには、Je t'attendais. 型以外の半過去の他の用法もうまく説明できることを示さなくてはならないが、紙幅の都合でかんたんに触れるに止める。

6.1. imparfait d'atténuation

- (17) a. Je *voulais* vous demander un service.
 b. Je *venais* prévenir Monsieur.
 c. Excusez-moi, je *cherchais* la rue du Mont-Blanc.

日本語訳は「あなたにお願いしたいことがあるのですが」が適切で、「～ノダ」という語形が用いられることに注意したい。「～ノダ」は客観的事実を述べるものではなく、「説明」モードの形式だと言われている。これを踏まえて婉曲表現の半過去の説

明として次を提案する。

(A) imparfait d'atténuation は「新たな事実の言明」ではなく、発話の場に語用論的に存在し言語的には表現されない何らかの事態 X の「説明」である。

(B) 「何らかの事態 X」は次のように規定できる。

a. Je voulais vous demander un service.

X=相手に近付いて話しかけたこと

b. Excusez-moi, je cherchais la rue du Mont-Blanc.

X=相手を呼び止めて話しかけたこと

(C) 話し手が [vouloir-vous-demander-un-service] を事実の言明としてでなく、事態 X の「説明」として提示し、依頼・要求の直接性を回避することで丁寧な効果が生まれる。

これに基づいて Excusez-moi, je cherchais la rue du Mont-Blanc は次のように図示される。

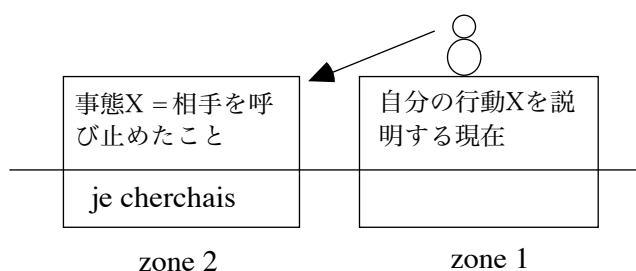


Fig. 8

6.1. imparfait forain

(18) Qu'est-ce qu'elle voulait, la petite dame ?

(A) 店主は客が店に入って来た時点で、その存在に気がついている。事態 X は「客の来店」である。ただし、来店の目的が商品の購入であることは自明であるため、「事態X」の説明すべき内容は「購入希望」である。

(B) 店主は客の来店を「事態 X」として過去に位置づけ、事態 X を説明すべき内容、すなわち購入希望を客に訊ねることで、事態 X の説明を先取りしている。

(C) 事態X 「客の来店」が起きた時点においては、客は店主の対話相手ではない。この語用論的状况を表示するために三人称が用いられる。

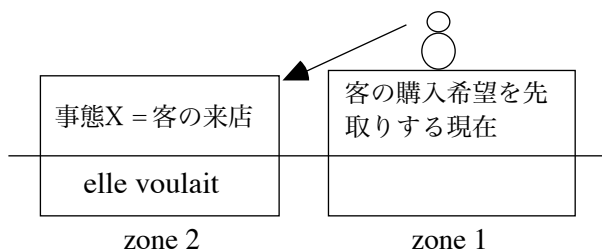


Fig. 9

7. おわりに

本稿ではフランス語時制の全体像を提示し、そのなかでの半過去の位置づけを手掛かりとして、Je t'attendais. 型の半過去の意味と成立要件を考察した。このタイプの半過去では、話し手は現在に視点を置いて過去の事態を眺めており、現在と半過去の間には「断絶」があるため、しばしば現在との対比を表す半過去とされている。しかし

その断絶は事象レベルのものだけではなく、話し手の認識レベルの断絶をも意味すると見なすことで、Je t'attendais. 型の半過去を正しく説明できることを示した。

本稿の提案する時制の全体像が正しいことを示すためには半過去の他の用法も含めて、半過去以外の時制の用法も整合的に説明できなくてはならない。この課題については稿を改めて取り組むことにしたい。(京都大学)

【注】

- 1) “L'imparfait est un tiroir «non-autonome», (...) Un énoncé rendant compte d'un événement à l'imparfait est difficilement interprétable en isolation.” (Sthioul 1998)
- 2) (10)の例文は過去に視点を置く自由間接話法としては容認される可能性があるが、ここではその読みは考慮しない。後で述べるように自由間接話法の半過去は、zone 2が発動されたもので、Je t'attendais. 型半過去とはタイプが異なる。自由間接話法の読みを考慮しないことは、ここでの論旨に直接影響しない。
- 3) これとよく似た時制の全体像はVerkuyl et al. (2004), Vet (2005)でも提案されているが、筆者がこの全体像を考案したのはこれらの文献を知る以前であり、独立に構想されたものである。

【参考文献】

- Bres, J. (2005), “L'imparfait : l'un et/ou le multiple ? A propos des imparfaits «narratifs» et «d'hypothèse»”, Labeau & Larrivée (2005), 1-32.
- de Saussure, L. & B. Sthioul (2005), “Imparfait et enrichissement pragmatique”, Labeau & Larrivée (2005), 103-120.
- Labeau, E. & P. Larrivée (eds) (2005), *Nouveaux développements de l'imparfait* (Cahiers Chronos 14), Rodopi.
- Le Bidois, G. & R. Le Bidois (1967), *Syntaxe du français moderne*, 2e édition, Picard.
- Le Guern, M. (1986), “Notes sur le verbe français”, S. Rémi-Giraud & M. Le Guern (eds) *Sur le verbe*, Presses Universitaires de Lyon, 9-60.
- Reichenbach, H. (1947), *Elements of Symbolic Logic*, The Free Press.
- Sten, H. (1952), *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Ejnar Munksgaard.
- Sthioul, B. (1998), “Temps verbaux et point de vue”, J. Moeschler (ed) *Le temps des événements. Pragmatique de la référence temporelle*, Kimé. 197-220.
- Verkuyl, H., C. Vet, A. Borillo, M. Bras, A. Le Draoulec, A. Molendijk, H. de Swart, C. Vatters, L. Vieu (2004), “Tense and aspect in sentences”, F. Corblin & H. de Swart (eds) *Handbook of French Semantics*, CSLI Publications, 233-270.
- Vet, C. (2005), “L'imparfait : emploi anaphorique et emplois non anaphorique”, Labeau & Larrivée (2005), 33-44.
- 阿部宏 (1989), 「Je t'attendais 型の半過去について」, 『フランス語学研究』 23, 55-59.
- 西村牧夫 (1985), 「現在に関わる大過去」, 『フランス語学の諸問題』, 三修社, 50-62.
- 春木仁孝 (1991), 「Je ne savais pas que c'était comme ça. — 再確認の半過去」, 『フランス語フランス文学』 59, 76-88.